

PP-2-325 切除不能食道癌症例に対するステント治療法の治療成績—特に気道との瘻孔形成例の検討
大平雅一, 山下好人, 松村有美子, 山崎政直, 久保尚志, 西原承浩, 山田靖哉, 八代正和, 澤田鉄二, 平川弘聖
(大阪市立大学大学院腫瘍外科 (第1外科))

【目的】教室における切除不能進行食道癌に対する金属ステント(EMS)留置の治療成績および瘻孔形成例について検討した。【対象・検討項目】最近5年間にEMS留置を行った20例を対象とし, EMS留置前後の摂食状況, EMS留置以外の合併療法と瘻孔形成の関係について検討した。【成績】摂食状況を摂食内容と量よりスコア化して検討したところ, スコアは留置前平均3.0から留置後10.0と有意に改善した。EMS留置以外の合併療法は16例に行われ, EMS留置前治療9例(CRT4例, CT4例, 放射線治療1例), 留置後治療7例(CRT2例, CT5例)であった。EMS留置後治療例では新たな瘻孔形成がみられなかったのに対し, 留置前治療9例中, CRTを行った4例と他治療の5例中1例(CT例)の5例に瘻孔形成がみられ, このうちEMSにて閉鎖できたのはCT例のみで, CRT後の瘻孔形成4例は閉鎖できなかった。【結語】切除不能食道癌症例に対するEMS留置は摂食状況の改善をもたらすが, 留置に先だて合併療法, 特にCRTが行われた場合, 高頻度に気道との瘻孔が発生し, この瘻孔はEMSにより閉鎖が困難であり, バイパス術などを考慮する必要があると考えられた。

PP-2-326 当科における大腸悪性狭窄に対するSelf-Expanding Stainless Steel Stentの使用経験
瀬戸武士, 中里知行, 廣澤知一郎, 吉田孝太郎, 作田奈美, 板橋道朗, 亀岡信悟
(東京女子医科大学第二外科)

<はじめに>近年, 食道, 胆道狭窄に対するステント留置の有効性が報告されている。今回我々は大腸悪性狭窄に対しSELF-EXPANDING STAINLESS STEEL STENTを留置し良好な結果を得たので報告する。<症例>当科にてSELF-EXPANDING STAINLESS STEEL STENTを使用した大腸悪性狭窄症例11例を対象とした。内訳は初発大腸悪性狭窄5例(直腸癌3例, 下降結腸癌1例, S状結腸癌1例), 切除不能再発大腸悪性狭窄6例(S状結腸癌術後2例, 直腸癌術後4例)であった。<結果>留置後の経過は初発大腸悪性狭窄症例5例全例が良好であった。一方, 切除不能再発大腸悪性狭窄症例6例中1例で留置後合併症を認め colostomy 造設となった。切除不能再発大腸悪性狭窄症例6例は全例が癌死したが, ステント留置から最長で11ヶ月間問題なく経過した。<結語>大腸悪性狭窄に対するSELF-EXPANDING STAINLESS STEEL STENTの挿入は人工肛門造設術と比較し低侵襲で, 安全かつ容易に施行可能であり, 全周性狭窄型大腸癌に対する術前減圧法として有用であり, また, 切除不能大腸悪性狭窄患者に対する肉体的精神的侵襲を軽減しQOLの向上につながるものと思われた。

PP-2-327 上部消化管疾患に対するステント治療の有用性と今後の展望
竹野 淳, 藤谷和正, 平尾素宏, 武田 裕, 辛 栄成, 三嶋秀行, 蓮池康徳, 沢村敏郎, 西庄 勇, 辻仲利政
(国立大阪病院外科)

【目的】ステント治療の目標はQOLの改善が第一だが, 追加治療により予後改善も得られる。当院での症例を検討し, ステント治療の有用性および今後の展望を検討。【対象】過去5年間の上部消化管疾患に対するステント治療15例。【結果】15症例の背景は, 年齢64歳(中央値), 男女比13:2, 食道癌8例, 胃癌6例, 肺癌1例。ステント挿入後6例に追加治療を施行。ステント施行前は全例経口摂取が不能, 施行後15例中9例が5分粥を摂取可能。50%生存期間は全症例で130日(中央値), 胃癌(n=6)667日, 食道癌(肺癌を含む)(n=9)65日, p=0.03であり, また追加治療群(n=6)222日, 無治療群(n=9)90日, p=0.20。在宅期間は, 全症例で41日(中央値), 胃癌(n=6)82日, 食道癌(肺癌を含む)(n=9)23日, p=0.01であり, また追加治療群(n=6)69日, 無治療群(n=9)26日, p=0.17。【結語】1食道癌に比べ生存・在宅期間がより延長する胃癌に対するステント治療は積極的に行うべきである。2.上部消化管疾患に対するステント治療は追加治療により, さらなるQOLの改善やより長期の予後が得られる。

PP-2-328 胆膵悪性腫瘍(切除不能・再発)における門脈閉塞性病変に対する門脈ステント留置症例の検討
濱田賢司¹⁾, 伊佐地秀司²⁾, 水野修吾³⁾, 岩田 真⁴⁾, 田端正巳⁵⁾, 山際健太郎⁶⁾, 横井 一⁷⁾, 上本伸二⁸⁾, 山門亨一郎⁹⁾, 中塚豊真⁹⁾
(三重大学医学部第一外科¹⁾, 三重大学医学部放射線科²⁾)

当科ではこれまで胆膵悪性疾患における門脈閉塞例に対し, 門脈ステント留置術を施行したので, その成績を報告する。【対象と方法】1994年7月から2001年12月まで胆膵悪性腫瘍切除不能・再発症例の門脈閉塞性病変に対しステント留置術を施行した症例は5例で, 胆管癌3例, 膵癌2例であった。この5症例のステント留置前後の変化及び予後につき検討し, 適応と有用性につき考察した。【結果】(1)ステント挿入前の臨床所見: 有症状例は3例で, タール便2例, 下血1例であった。無症状2例は肝機能障害のみと脾腫・肝機能障害・血小板減少が各1例であった。(2)ステント留置部位と留置前後の変化: 門脈閉塞部位は門脈本幹が1例, 門脈本幹～脾静脈が4例で, 側副血行路を3例に認めた。ステント留置前の門脈圧は23.3±3.8mmHgであったが留置後は13.0±5.0mmHgと著明に低下し, それに伴い臨床所見は軽快した。(3)補助療法と予後: 補助療法は3症例にのみ施行されたが, ステント留置後平均生存期間は胆管癌症例で128日, 膵癌症例では45日であり予後不良であった。【結語】胆膵悪性疾患における門脈閉塞による有症状例では, 門脈ステントは症状改善に有効な手段と思われた。